

# 緑の地球

## GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



黄土高原写真コンクール「緑化活動」部門受賞作『地の人』(稲垣文拓さん撮影)

### Contents

- 加藤登紀子コンサート♪歌いつぐ思い ..... P 2
- 新・大同における GEN の緑化協力 ..... P 3
- 大きく育った木に再会する日まで..... P 4

2006.11

112

認定特定非営利活動法人 緑の地球ネットワーク

GEN15周年記念加藤登紀子ランチタイムコンサート

♪ 歌 っ つ ぐ 思 い

柳原 恵子 (GEN 会員)

9月30日、テアトロスガリー青山で、GEN15周年記念・加藤登紀子ランチタイムコンサートが開かれました。遠方からの人もふくめて83人があつまり、なつかしい歌をいっしょにくちずさんだり、加藤さんの環境保護活動のお話に聞き入ったり、楽しい昼下がりを過ごしました。



母親が加藤登紀子だと思っ  
てたんだよね」と、今年33  
才になった息子。そういえば、  
夫がおしめを替えている横  
でカセットをかけて、「オ  
ル・ジョリ・モア・ドウ・メ  
ア・パリ……」とか歌って  
いたような覚えがあるよう  
な……。

そんなトラウマを息子に  
与えるほど、同時代を生き  
てきた加藤登紀子さん。1曲目の「檸檬」  
で涙がポロポロ。2曲目の「生きてりゃ  
いいさ」でドゥッ。

やっぱり登紀子さんの歌は、しみじ  
みとなつかしい。故郷のようなものか  
なあ。たくさんの思い出と、勇気を、  
ありがとう。登紀子さんの提案通り、  
コンサートが「Power to the People」で  
元気に終われば、もっとよかったです。

数日後の新聞に、「八ツ場ダム問題で  
悩む加藤登紀子」という記事を見つけ

ました。「何が本当に住民のためになる  
のか」と、悩んでいる登紀子さんの話  
が載っていました。悩みますよね。迷  
いますよね。どちらが正しいかなんて、  
本当にわからない時代。ただあるのは、  
自分がどちらの立場に身を置くかを選  
ぶことなのでしょうね。

ある8才の女の子が言いました。  
「あたしは、あしたがあることがすご  
くうれしいの。」

「明日がある」と何の疑いもなく信じ  
ていられる幸せ、希望を持てるという  
幸せを、持ちつづけたいものです。今、  
これまでGENがしてきたことの大切さ、  
そしてこれからもどんなに大切かを、  
あらためて感じています。

今年が15周年なら、また20周年、  
30周年の記念集会も開きたいですね。  
「生きてりゃいいさ」ではありますが、  
生きていても、そうでなくても、命も、  
思いもちゃんとつながっていくのです  
から。

緑の地球ネットワーク15周年、おめ  
でとございます。高見さん、太田さ  
ん、GENのスタッフ、活動に関わった  
皆さんに感謝いたします。そして、記  
念のコンサートを開いてくださってあ  
りがとうございました。いつ会っても  
幼なじみのような親しさを感じる高見  
さん、太田さん。初めてお会いしたのに、  
とてもなつかしい大塚さん、久富さん  
……お目にかかれて嬉しかったです。  
「僕さあ、子どもの頃ずっと、自分の

『GEN15周年を祝う  
みんなの集い』のご案内

このたび有志が相談して、GEN 発足  
15周年を祝う集いを企画しました。会  
員だけでなく日ごろ GEN に協力をいた  
だいているかたがたと、懇親の輪を  
広げたいと思います。ぜひご参加を！

◆呼びかけ人：青木 猛、石原 務、  
稲垣 文拓、岡田 真子、楠森 至朗、小  
寺 範生、篠原 大、西峯 亮三、松井  
浩、松島 清、八木 丈二、山口 修、  
会田 伸子、東川 貴子

●日時：2007年1月27日(土) 17時  
～20時

●場所：大阪弥生会館(JR「大阪」駅、  
各線「梅田」駅下車。大阪市北区芝  
田2-4-53 Tel.06-6373-1841)

●参加費：5,500円

●申し込み：12月11日までにGEN事  
務所まで。

GEN 写真展

@ JICA 地球ひろばのご案内

新旧とりまぜて、たくさんの写真パ  
ネルを展示しています。会期が残り少  
ないですが、未見の方はぜひお立ち寄  
りください。

●日程：11月18日(土)まで。※月曜  
休館(10時～20時・土曜は18時まで)

●場所：JICA 地球ひろば(東京メトロ  
日比谷線「広尾」駅A3出口徒歩1分。  
tel. 0120-767278 e-mail : chiky  
uhiroba@jica.go.jp http://www.jica.  
go.jp/hiroba/)

◎同会場にてJICA・NHK 共催「砂漠化  
する惑星」12月17日まで開催中。

写真パネル展&  
コーヒーアワー

日本経団連自然保護協議会と世界銀

行情報センター共催のパネル展とコー  
ヒーアワーに、GENが登場します。

パネル展『中国黄土高原での緑化活動』  
○日時：11月20日(月)～12月1日(金)

開館時間 10時～18時  
コーヒーアワー『砂漠化防止に取り組  
んだ15年』

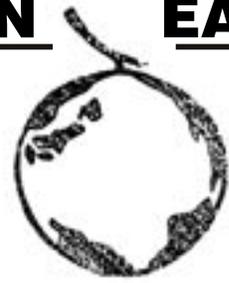
○日時：11月28日(火) 18時30分～  
20時

○講師：高見邦雄(GEN事務局長)

○参加費：無料

○要申込み。PIC東京(tel. 03-3597-6650  
fax. 03-3597-6695 E-mail : ptokyo@  
worldbank.org)に、氏名、所属、連  
絡先を明記してFAXまたはメール  
でお申し込みください。

●場所：PIC東京(世界銀行情報セン  
ター)千代田区内幸町2-2-2 富国  
生命ビル1F 各線「霞ヶ関」駅、都  
営地下鉄三田線「内幸町」駅  
http://www.worldbank.org/japan/jp



## ボーナスカンパのお願い

緑の地球ネットワークの活動を開始してから満15年となりました。この間、数え切れないほど多くみなさんのご協力に支えられて継続できていることに感謝いたします。

中国山西省大同市での協力活動は、カウンターパートである緑色地球ネットワーク大同事務所を中心に、環境林センター、霊丘自然植物園、カササギの森、白登苗圃、かけはしの森などの諸施設を立ち上げ、運営を継続しています。15年間で山地、小学校果樹園に5,060ha、1,635万本の植林を実施しました。

今後はこれらの諸施設、植林地を充実させていくことが大きな課題です。

緑の地球ネットワークの会員は現在約650個人・団体です。まだ会員でないみなさんの入会をお待ちします。入会・ご寄付等、下記のようにご協力をお願い申し上げます。

緑の地球ネットワークは国税庁の認定により2005年6月1日より認定NPO法人となりました。緑の地球ネットワークにご寄付いただくと税制上の優遇が

受けられます。

なお、作業の都合上、一律に郵便振替用紙を同封いたします。近々にご協力いただいた方には重ねてのお願いではありませんので、ご了承ください。

また、郵便振替は、極力自動振替機をご利用いただくようお願いいたします。GENが負担する手数料を節約することができます。

●会費（年額1口。会費には会報購読料が含まれます。）

一般	12,000円
家族（2人目から）	6,000円
学生（高校生以上）	3,000円
ジュニア（中学生以下）	1,000円
団体	12,000円
賛助	100,000円

●会報購読料 年間 2,000円

●緑化基金 中国黄土高原緑化活動にあてます（2割までを国内管理費）。金額自由

●運営基金 国内管理費にあてます。金額自由

●カササギの森協力費 1ha緑化5年分

費用。1口50,000円

●サポート基金 new!!

大同の拠点の管理・運営にあてます。

◇環境林センター◇霊丘自然植物園

◇白登苗圃◇かけはしの森

各1口10,000円

☆認定NPO法人に寄付すると

個人の場合は、寄附金額-5,000円が所得金額から控除され、この分には所得税が課税されません。

法人の場合は、一般の寄附金算入限度額とは別に同額の損金受入限度額が設定され、この分には法人税が課税されません。

相続財産を寄付した場合は、申告期限内であれば寄付した金額は相続税等の対象となりません。緑の地球ネットワークへのご協力のうち、緑化基金、運営資金、会費のうち2口以上の部分と賛助会費のうち12,000円以上の部分が寄附金控除の対象となります。

### 新・大同における GEN の緑化協力 - 1 -

## 白登苗圃

環境林センターにつぐ第二の苗圃、「白登苗圃」がJICA草の根技術協力の委託事業として昨年春からスタートしました。2005年3月31日の開所式以来、1年半が経過し、来春には初めての出荷を見込んでいます。

環境林センターの土壌は、粘土質で粒子が細かすぎるために、針葉樹の育苗に適さず、うまく育ちません。針葉樹のための新しい苗圃を、というのが地元スタッフとの長年の共通の願いでした。2004年秋にJICAの助成が決定すると、すぐに大同市内から東へ10キロほどの場所にある、大同県周土庄鎮牛家堡村に、砂地の土地を確保しました。ここは、もともと地元で「小老樹（小さな古いぼれの木）」と呼ばれるポプラの林があり、60年代に植えられたポプラが、水不足のために伸び悩んでいました。しかし長年にわたってポプラの落ち葉がこの地の土を肥やしたため、

比較的豊かな土壌を確保することができました。そして歴史上「白登山の戦い」として名高い白登山（現在は馬鋪山と呼ばれる）のふもとに位置することから、「白登苗圃」と名づけられました。

その後、現地スタッフのこの新苗圃にかける意気込みを表すかのように、驚異的なスピードで整地作業、井戸掘り、配電工事等のインフラ整備を進め、半年後の2005年春にはGENワーキングツアー参加者を迎え、開所式を行いました。

2005年春から本格的な育苗が始まり、現在では、8haの面積に、モンゴリマツ、アブラマツ、トウヒ（雲杉）、トショウ（杜松）、イブキ（桧柏）などの針葉樹を中心に、8万株を育てています。またモンゴリマツとアブラマツは、菌根菌を使った育苗技術によって120万株を種から育てて

います。ここで育てた苗が、大同市各地の「地球環境林」などのプロジェクトで活用されます。

昨春以降のツアー参加者、約500名がすでにこの白登苗圃を訪れ、春は植樹、夏は草取りなどの作業に励みました。

まもなく大同に長い冬が訪れます。小さなマツ苗を厳しい寒さと乾燥から守るために、土をかぶせる越冬準備がすでに終わりました。昨年同様、今年も小さな苗が無事に冬を越せるよう、スタッフ一同で見守っています。



# 大きく育った木に再会する日まで……

今夏～秋に大同の GEN 緑化協力地を訪れた日本からのツアー・視察団は 10 グループ、200 人を超えました。例年、全ての派遣団体から手記を寄せていただくのですが、さすがに今回はスペースがたりません。代表して、明星大学 (8/4～13、10 名)、サントリー労働組合 (8/19～26、12 名)、イオン労働組合 (8/23～28、20 名+他企業から参加 2 名)、全国都市下水道対策協議会 (9/22～28、15 名) のツアー参加者から寄せられた手記をご紹介します。

## 得たものと失ったもの

フィールドワークツアーの日記から  
峰尾 瞳 (明星大学学生)

9 日間にわたる中国の旅では、大同という中国の田舎に行き、農作業、万里の長城登りや見学をしました。普段日本にいるときは体験しないことを体験できた上に、大学に入って身につけた中国の言語や文化の力を、この旅行では試す機会ができたと思います。

一番印象に残ったのは、農村宿泊でした。日本にいるときは反対の生活をし、まさに異文化体験実習だったと思います。シャワーもクーラーもなく、トイレは穴だけという生活はつらかったです (農村に泊った翌日に腹痛が起きたのは大変だった)。でも、後々のよい経験になったと思います。

この旅行で中国の文化に触れて、得たものと失ったものがあります。まず得たものは中国文化の知識で、これは旅の目的でもありました。大学に入って以来、ずっと中国語やアジア文化を学び続け、中国を旅してもっと知識をつけたい、中国語を上手になりたいという意欲も増しました。失ったものは、中国に対する偏見です。中国に来る前は、中国人は日本が嫌いで、日本人である私たちを目の前にしたら、石を投げってくるんじゃないか!? と、少し思っていました。反日の報道の映像をテレ



大同の村では、みんな親切にしてくれました。

ビで見るとかぎりでは、行く前は正直怖かったです。しかし旅行中、そんなことはいっさいなく、接した人たちはみんな親切で、とても安心しました。

長いようで短かった 9 日間、これは今までの夏休みの中でも、とても大きなできごとになりました。

## 私がこれからできること

たくさんのものをもらいました  
今井ひとみ (サントリー労働組合)

仕事柄、日本国内を出張することがよくあります。日本中どこへいこうか、青々とした森林や、季節によってうつろう田園風景が広がっており、日本というのは本当に緑豊かな国だなと実感します。しかし、今回私たちがセミナーで訪れた中国大同は、本当に緑がありません。大同に向かうバスから見る景色でも、その水不足や砂漠化の深刻さがすぐにわかりました。本当に山にも、平野にも「木」がほとんどないのです。山肌にうっすらと見える緑は、夏の間だけ育つ草とのこと。また、道路脇にならぶ木々は、明らかに人間が植えたもので、幹も細く、ややもすると折れてしまいそうな感じで、我々が訪れた 8 月でも申し訳程度に葉っぱをつけているだけでした。

GEN の高見さんからは、大同がかかえる問題について、水不足以外にもさまざまなお話を聞くことができました。雨が降っても、木がないので水を蓄えておくことができず、すぐに流れてしまう土壌とそれによってできた浸食谷。そういったところは痩せていて、作物も育ちにくい。また、川の水質汚染についても教えてもらいました。炭鉱の町・大同では、採掘した石炭を川の水で洗い、その洗った水をまた川に流す。流した水に

は様々な汚染物資も含まれていて、貴重な水をさらに汚染してしまっている。聞けば聞くほど、大変な問題が起きていることを実感させられました。

今回のセミナーで、私たちは、大泉山村で植林活動のお手伝いをしました。私が植えたわずか数十本の木がこの大きな環境問題にとってどれだけの解決になるかはわかりません。もっとというと、私が植えた木も植えっぱなしでは育たないので、これから水をやったり、冬の寒さに備えたりと、村の方々の努力が必要になります。そういった意味では、自分の力があまりに微力すぎて、少し申し訳なく感じました。



あたたかくもてなしてくれた大泉山村の人たちに感謝。

その一方で、逆に、私が村の方や子どもたちにももらったものの方が多いかなと思います。子どもたちの無邪気な笑顔。現金収入がほとんどない村で、大学に就いて看護婦になりたいという少女の夢。満天の星空。初対面にもかかわらず、本当に快く私たちを迎えてくれた村の方々。一生懸命、現状の課題と向き合い緑化事業をすすめている人々の熱意。わずか数日間でしたが、本当に教えてもらうことが多かったセミナーだったと実感しています。

このようにたくさんのお話を聞いた私ですが、今後できることは、このセミナーで感じたことを他の方にも伝えていくことかと思っています。1 人でも多くの日本人に、中国の環境問題に関



## 植物屋のこぼれ話 (続編) その10

立花 吉茂 (GEN 代表・花園大学客員教授)

### ●海外での杉(スギ)の馴化栽培

アクリマチゼーション (Acclimatization) といわれている気候馴化栽培がある。原産地から気候の少し違う他の地域に植物を根付かせようとする場合に、遺伝的にその種 (Species) のもつ多様性を活用して、実生による選抜育種をおこなうことをさす。栽培植物はすべてこのようにして改良されたものである。栽培植物の場合は目的別に選抜が異なるが、植林の場合などは、本来の性質の形で異国に根付いてくれさえすればよいのである。

かつて筆者はコスタリカで1年間暮らしたとき、日本からムクゲ、サルスベリ、フヨウなどの枝を持参して栽培したが、すべて失敗に帰した。枝は根がでて育ちはじめたが、すぐに生長がとまって元の枝に葉がついているだけであった。しかし、種子をまいたものは2~3%だけ立派に育ち、15年経ったいまも花を咲かせているという。これは温帯の植物の日光反応が北緯5度という赤道直下に近い場所では適応できなかつたのである。日照時間の差は栄養体では適応できなかったが、種子で増えたものにはわずかながら生長できるDNAが存在していたのである。コスタリカの中央部は年平均22℃で生長の適温であるから、温度の差によるものではない。これは種の多様性が生かされた好例である。

このようなことは、長い現役中にいろいろな国で経験したが、今回は杉(スギ)の植林の経験を記すことにしよう。

### ●レユニオンの杉栽培

レユニオンはインド洋の南方マダガスカル島の東にあるフランスの海外県で南回帰線に近い熱帯で、サトウキビ栽培のさかんな島である。4,000m級の山があり、ハイビスカス3種が野生し、ハワイや沖縄によく似た環境にある。ここに日本の杉が植林されて成功している。この島に「杉に憑かれた男」とよばれるJ・M・ミゲという森林公社の局長がいる。1980年、ハイビスカスの

調査にこの島を訪れたとき、いろいろと彼の世話になった。日本から杉が導入されたのは1888年というからずいぶん昔のことである。しかし、見本程度の植栽であつたらしく、本格的になつたのはミゲ氏が就任する20年ほど前のことであつたという。彼は日本の林野庁林業講習所でスギ植栽の勉強をした経験がある。最初苗や種子を導入したが、やはり育つた少数の株からとつた種子をまいてその中からよい系統を選び出して成功したという。アクリマチゼーションにかなりの時間がかつたのである。彼に案内してもらつて造林地へ行って驚いたのは、まだ10年ほどの若木であるが、実に元氣よく伸びていて、林内に入ると不思議にも日本の山に入った感覚になつた。植林面積も実に広く、造林の達成率は1万ヘクタールの35%で、目標の半分以下であるというが、異国でこんなに広い杉林が広がっているのを見たのは初めてで、おおいに感動したものである。

この島には毎年のごとくサイクロン(台風)がやってくることで、雨の多い亜熱帯的な山腹は沖縄にあまりにもよく似ていた。

### ●タイ国でのスギの植林

タイ国で原生林伐採後放置された土地の緑回復作戦が日本・タイ両国の共同でおこなわれた(1989~1991年)チームに参加したときのことである。タイ北部の試験地にスギの植栽もおこなわれた。活着率はそこそこであつたが、生長がきわめて悪く、じょじょに枯死して数年後に生き残つたのは2~3%にすぎなかつた。これは、日本で育成された苗を持ち込んだものである。しかし、現地で種子をまいたものは急速に生長した。わが国原産のスギにもかなりの多様性がある。裏日本にはウラスギ(裏杉)とかアシウスギ(芦生杉)とかいう品種があり、これは実生選抜でできたもので、屋久島あたりの野生種が原種と考えられるから、秋田杉をはじめ日本全国に植えられてその

土地に合う遺伝子が活用されたのである。中国の雲南省にはスギと同属の柳杉(Cryptomeria fortunei Otto et Dietr.)というのがある。見た目には日本のスギと区別ができなかつたから、日本のスギはおそらく気が遠くなるほど昔に日本にやってきたのであろう。この中国杉と日本の杉とごちゃまぜの交配種を作ればその遺伝的な多様性が拡大されて、もっと多くの土地に適応できるであろう。



レユニオン島に繁茂する日本のスギ(杉)

助成が決まりました  
ありがとうございます

### ●日中緑化交流基金

大同市北部の緑化に対し、870万円の助成が決まりました。



黄土高原史話 〈32〉

## 漢と匈奴の攻防は

谷口 義介 (摂南大学教授)

吉川幸次郎先生の『漢の武帝』。各章ごとのタイトルが「阿嬌」「匈奴」「賢良」「西域」「神仙」と並びますが、これはア行・カ行・サ行の順を踏んだもの。博士の周辺から漏れ聞いた話です。

それはともかく、問題は匈奴。

漢初以来の弱腰外交に不満があったうえ、前回述べた馬邑事件の大失敗。腹わたの煮えくり返った若き武帝、4年後のB.C.129年、1人の男を車騎将軍に任じます。これぞ翌年、武帝の子を生んで皇后となる衛子夫の弟ながら、微賤の出の衛青なる者。父が他家の婢妾と密通して生ませた子で、少年時、父の郷里の山西平陽(臨汾)で羊の放牧。「当時その辺の風俗は、実はだいたい匈奴化しており、羊かいの童子は、馬に飛び乗って、山野をかけめぐっていたのではないか。匈奴化した漢人、それこそ匈奴と戦うのに、最も適した人間である。」(『漢の武帝』岩波新書版 67 ページ)

むろん、衛青1人では戦さに勝てません。

車騎将軍は文帝のとき初めて置かれた官ですが、文帝・景帝時代から、政府はいわゆる馬政を施行。民間に馬の生産を奨励し、軍馬1頭を育てれば3人の兵役を免じます。また馬苑36ヶ所を西北辺に設置して、総計30万頭を飼育して、専門の役人に管理させ、柵を

厳重に防護する。かくて武帝の即位のころ、

「一般人民も馬に騎って街巷を行き、その馬は田野に育てられ、阡陌の間に群れていた。」(『史記』平準書)

そのうえ文・景の政治もよろしきを得、国庫には財貨が満ち溢れ、倉粟の粟は腐るほど。しかし、十分な軍馬の用意があつてこそ、強力な騎馬軍団が編成でき、匈奴と対等に戦えます。

B.C.129年秋、衛青は騎兵1万で匈奴の本拠を急襲し、斬首数百の戦果をあげる。これまで守勢一方の漢軍が、長城の北へ打って出た記念すべき戦いで

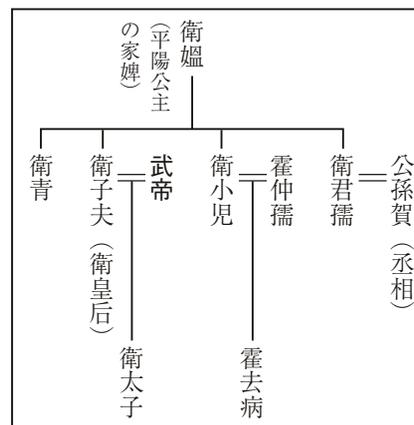
す。翌128年は、騎兵3万、山西の雁門から出撃し、数千を斬って帰還する。

さらにその翌年には、山西の雲中から出て長城の北側を西に廻り、長駆して甘粛の隴西へ。オールドスの地を手に入

り、朔方郡を設けます。これに対し匈奴では、軍臣单于が死んで弟が即位。B.C.126年夏、数万騎をもって代郡に侵入、太守を殺し郡民を掠奪。秋には、雁門郡を侵します。

またその翌年には、大挙して代・定襄・上の3郡に侵入し、数千人を殺戮寇掠。

B.C.124年、衛青は6将軍・十余万の兵を率て、朔方郡から出撃し、匈奴の右賢王を包囲する。辛うじて右賢王は逃げますが、漢軍はその部下の小王十



衛皇后一族

余人、男女の衆1万5千を捕虜として、意気揚々と引き上げる。衛青は大將軍へと栄進し、位人臣を極めます。

このあと匈奴は長城の外に駆逐され、戦いの場は甘粛・ゴビ砂漠方面へ。漢軍の主役もこのころより、衛青からその甥の驃騎将軍霍去病へと交替し、敵に大打撃を与えます。かくして漢は念願の西域ルートを確認して、オアシス諸都市を支配する。おりしも武帝は壮年期、漢の版図は極大です。

匈奴には内紛生じて、弱体化。だが漢側も、巨額な軍事支出で財政破綻、重税による経済のひずみが加わって、社会不安が広がります。

それでも武帝、最晩年に至るまで、匈奴攻撃を止めません。

B.C.87年春、在位五十有余年、享年70歳にして、五柞宮で崩御する。

『漢の武帝』の終章は、「返魂」「望思」と「むすび」で閉じる。もちろん八行とマ行です。

## 2007年春の黄土高原ワーキングツアー予告

大同に春の訪れを告げる(?) GENのワーキングツアー。でも、来春は例年より遅らせて、アンズの花を楽しんでいたかどうか考えています。もちろん、植樹や村での交流、農家でのホームステイ、GENの協力拠点訪問など通常のメニューも用意します。まだ最終決定ではありませんが、日程が大きく変わることはないので、一度アンズの花を見てみたいと思っていた方、開花期予想が当たることを祈りながら、いまから予定しておいてください。

- 日時：2007年4月17日(火)～24日(火) 7泊8日
- 訪問地：中国山西省大同市(北京経由)

- 費用(予定):一般=18万円、学生=17万円(国際航空運賃、中国国内での交通費/食費/宿泊費、空港使用料、GEN年会費を含む。個人行動時の費用、旅券取得費用は含まない。変更になる場合があります)※中国国際航空利用 ※関西空港発着 ※成田利用・北京合流希望の方はご相談ください。
- 定員:30名(先着順)
- 申込み締切:3月7日(定員に達し次第締め切ります)
- 問合せ・申込み:GEN事務所までご連絡ください。応募書類を郵送します。



【第32回】中国文化フォーラム  
中国緑化と環境を考える  
中国各地の日中緑化事業報告

いま、中国では、日本のさまざまなNPOがさまざまな場所で緑化に取り組んでいます。いくつかの団体が報告をおこないます。

【北京市西部における保安林造成モデル 日中緑化一門斗溝】

○日時：12月9日（土）

○講師：永井博記さん（アジア協会アジア友の会テクニカルアドバイザー）

【甘粛省蘭州の緑化】

○日時：2007年1月20日（土）

○講師：林青彦さん（NPO黄河の森・緑化ネットワーク事務局長）

【雲南省大理白族剣川県剣湖と敦煌市黒山嘴風沙口の植林】

○日時：2007年2月17日（土）

○講師：鈴木健次さん・石田和孝さん（NPO大阪府日中友好協会緑化委員会）

●時間：14時～16時

●場所：上海新天地 6F（地下鉄千日前線、堺筋線／近鉄奈良線「日本橋」駅5番出口南へ5分、地下鉄御堂筋線「難波」駅4番出口／南海「難波」駅南出口南東へ5分。大阪市中央区日本橋2-7-5 Tel. 06-6646-1390）

●会費（1回）：一般 1,500円、学生 500円

●主催：NPO大阪府日本中国友好協会（Tel. 06-4395-1111 Fax. 06-4395-1113 E-mail: jcf@mail.infomart.

\*当欄掲載のイベント情報は掲載時点のもので、その後変更になる可能性があります。主催者にお確かめのうえ、ご参加ください。

\*当欄に情報をお寄せください。本紙は奇数月15日ごろの発行で、締切は前月の末です。なお、紙面の都合により掲載できない場合があります。ご了承ください。

or.jp <http://www.kaigisho.com/jcf/>

甲浦ポンカンをどうぞ

年末年始の贈り物に、黒潮と太陽のめぐみをうけて育った土佐のポンカンはいかがですか。もちろんご自宅用にも。高知県から「8割減農薬農産物」の認証をうけています。

●ポンカン（低農薬・有機栽培）

A	3L/2L	5kg	化粧箱	4,000円
B	〃	〃	普通箱	3,700円
C	〃	3kg	化粧箱	2,600円
D	L	5kg	化粧箱	3,500円
E	〃	〃	普通箱	3,200円

○出荷：2007年2月まで

★送料別途。関西 630円、関東 840円（20kgまで）。

★お申し込みは田中隆一さんまで。

〒781-7411 高知県安芸郡東洋町甲浦田中農園 TEL/FAX. 0887-29-2500

E-mail: [tanakan@tk2.nmt.ne.jp](mailto:tanakan@tk2.nmt.ne.jp)

※売上の一部をご寄付いただいているので、ご注文の際、「GENの紹介」と一言添えてください。



編集後記

「中国はこわい」と思っている大学生が多い、と聞いてびっくりしました。昨年の反日デモ報道の影響でしょうか、あまりにも単純じゃないですか？

以前、GENの事務所に遊びにきた大学生が「『ゴーマニズム宣言』を読んで目からウロコが落ちました」と真面目にいうので愕然とした覚えがあります。そのときは、「なんでも鵜呑みにせんと、できるだけ一次資料に近いところをあたってみなあかんで」というのが精一杯。三無主義といえば無気力、無関心、無責任でしたが、近ごろは十三無主義だそう。それでは多すぎるので新三無主義がたくさんあって、無知、無邪気、無批判もそのひとつ。マスゴミとさえいわれる一部のたれながし報道や、玉石混交のネット情報を検証もせず素直に信じてしまうのですね。

関係性というのは、相互作用です。あいつ、なんか好かんなあと思っていると、どうも先方も自分を嫌っているような気がする。そこで、えっ、意外とええところあるやん、という発見があると、いい友人になれたりします。

今回ツアーの感想をよせてくれた峰尾さん、「中国への偏見」を大同ですててきました。「自分の目で中国を見たことないけどなんだかこわい」けれど、「行ってみたら中国悪いとこじゃなかったよ」と自分の体験で判断した。そんな若者が、増えたらいいなあ。（東川）